

温故知新：まち歩き 刈谷市歴史博物館：葛飾北斎展

2026.5.19

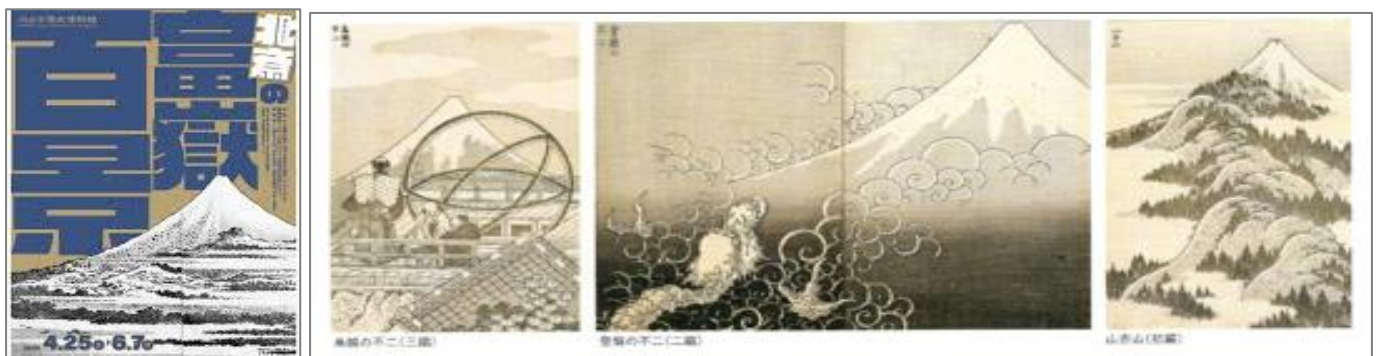
31期y.okuno

北斎が描いた2つの代表作、カラーの『富嶽三十六景』と、モノクロの『富嶽百景』を見比べると、実はタイトルの文字が違っています。

- 『富嶽三十六景』 —— 「富士」（目に見える実際の山）
- 『富嶽百景』 —— 「不二」（精神世界や概念としての山）

北斎はこの2つの言葉を、ただの言い換えではなく、描く対象の「性質」によって明確に使い分けていました。「不二」という文字には、文字通り「2つと存在しない、唯一無二の聖なる山」という意味が込められています。また、仏教（特に禅宗）の言葉に「生と死」「物と心」のように対立して見えるものも、本質は一つであるという「不二（ふに）」という概念があります。

北斎にとって『富嶽百景』で描く山は、単に見える「現実の富士山（富士）」ではなく、日本人の信仰や魂の根底にある「神格化された、絶対的な存在（不二）」だったのです。



1. 全 102 図が「額装」で一堂に会する貴重な機会

『富嶽百景』は本来、初編・二編・三編からなる「和綴じの絵本」として出版されたため、通常であれば一度にすべてのページを見ることは困難です。しかし本展では、図版を一つずつ額装にし、全 102 点が一堂に展示されています。

2. あえて解体・再構成された「7つのテーマ」

本の掲載順の通りに並べるのではなく、展示では掲載順をあえて解体し、北斎の視点をひもとく「伝説・物語」「信仰（富士講）」「風習・民俗」「名所」など7つのパート（章）に分けて再構成されています。北斎がただ風景を描くだけでなく、当時の人々の暮らしや信仰、古くから伝わる物語の中にどのように富士山を溶け込ませ、表現しようとしたのか？「独創性」について解説されています。

3. 『富嶽三十六景』の先にある、墨線と構図の究極の美

有名なカラーの錦絵『富嶽三十六景』（「赤富士」や「神奈川冲浪裏」など）を完成させた後、北斎はさらに富士の表現の可能性を追い求めて、この『富嶽百景』に着手しました。

こちらはカラーではなく、墨の濃淡（モノクロ）で表現された世界ですが、それゆえに北斎の「圧倒的なデッサン力」や「奇抜で計算し尽くされた構図」がより鮮明に伝わってきます。波頭の細かな動き、飛び立つ鳥の群れ、風に煽られる人々の躍動感など、細部まで施された彫師・刷師の職人技も見所です。

